

匹見町埋蔵文化財調査報告書第36集

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

# 田屋ノ原遺跡

2001年3月

島根県匹見町教育委員会

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

# 田屋ノ原遺跡

2001年3月

島根県匹見町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、匹見町教育委員会が平成12年度に行った益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う、川屋ノ原遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会		
調査員	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺 友千代	
	匹見町教育委員会主任主事	山本 浩之	
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田 美文	
遺物整理員		大賀 幸恵	大谷 真弓
調査指導	島根県教育委員会文化財課		
	山口大学人文学部教授	中村 友博	
事務局	匹見町教育委員会教育長	寺戸 等(平成12年9月30日まで)	
		松本 隆敏(平成12年10月3日まで)	
	匹見町教育委員会次長	大谷 良樹	
発掘作業員	栗田 定 栗田 勉	栗田 修 森脇 雅夫	
	齋藤 直行 岡本 三生	長谷川時子 齋藤美代子	

3. 調査に際しては、島根県益田農林振興センターの池田技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただきとともに、山口大学人文学部の中村友博教授から一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、土地所有者をはじめ、地元の方々に終始多大なご協力をいただいたことに対して、ここに感謝の意を表したい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構-P、土坑状遺構-SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した現地図面は、美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺ものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

5. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員及び遺物整理員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺が行った。

# 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯・経過 .....	(渡辺 友千代) .....	1
第1節 調査に至る経緯.....	.....	1
第2節 調査の経過.....	.....	1
第2章 調査地区の立地的環境 .....	(渡辺 友千代) .....	2
第1節 地理的環境.....	.....	2
第2節 歴史的環境.....	.....	3
第3章 調査の概要 .....	(渡辺 友千代) .....	5
第1節 はじめに.....	.....	5
第2節 調査区の設定.....	.....	5
第3節 堆積層序と遺物包含層.....	.....	5
1. 堆積層序.....	.....	5
2. 層序と遺物・遺構.....	.....	5
第4節 遺構.....	.....	7
1. はじめに.....	.....	7
2. 遺構状況.....	.....	7
3. 結句 .....	.....	12
第4章 出土遺物 .....	(渡辺 友千代) .....	13
第1節 はじめに .....	.....	13
第2節 遺物の出土状況 .....	.....	13
1. 出土遺物について .....	.....	13
2. 遺物の出土傾向 .....	.....	13
第3節 実測遺物 .....	.....	14
1. はじめに .....	.....	14
2. 実測遺物 .....	.....	14
第4節 小結 .....	.....	18

## 挿図・図表目次

第1図 位 置 図	1
第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図	2
第3図 地形断面図	3
第4図 調査区配置図	4
第5図 土 層 図	6
第6図 遺構指小図	8
第7図 遺構陥入状況図(1)	9
第8図 遺構陥入状況図(2)	10
第9図 遺構陥入状況図(3)	10
第10図 遺 構 図	11
第11図 縄文土器実測図	15
第12図 石器実測図	16
第13図 弥生土器実測図(1)	17
第14図 弥生上器・底部実測図	19
第1表 遺構計測表	7
第2表 出土遺物集計表	14

# 図 版 目 次

## 図版 1

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1. 遺跡の遠望（北西から）      | 2. 遺跡の近景（南から）      |
| 3. 調査前の除草作業風景       | 4. 発掘作業風景（B調査区）    |
| 5. 層序堆積状況（B調査区の北西隅） | 6. 捣乱堆積状況（D調査区の南壁） |
| 7. 滑石混入土器の出土状況      | 8. 縄文土器の出土状況       |

## 図版 2

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1. 打製石斧の出土状況        | 2. 磨石の出土状況          |
| 3. 弥生土器の出土状況        | 4. 弥生土器の出土状況        |
| 5. SK01・02の表出状況     | 6. C調査区の遺構表出状況（西から） |
| 7. A・Dベルト撤去後に表出した遺構 | 8. D調査区の遺構表出状況（東から） |

## 図版 3

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1. A調査区の遺構表出状況（東から） | 2. SK02の半截状況（西から）   |
| 3. SK11・12・13の半截状況  | 4. SK13の半截状況        |
| 5. P03の完掘状況         | 6. D調査区の遺構完掘状況      |
| 7. SK01・02の完掘状況     | 8. 曙ぎわの遺構完掘状況（SK09） |

## 図版 4

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1. B調査区の遺構完掘状況（南東から） | 2. C調査区の遺構完掘状況（北西から） |
| 3. D調査区北半の遺構完掘状況     | 4. 東からみた遺構完掘状況       |
| 5. 南からみた調査区の完掘状況     |                      |

## 図版 5

- |            |            |
|------------|------------|
| 1. 縄文遺物    | 2. 弥生土器（1） |
| 3. 弥生土器（2） | 4. 土器底部    |

# 第1章 発掘調査に至る経緯・経過

## 第1節 調査に至る経緯

本遺跡は、島根県美濃郡邑見町大字澄川イ322番地に所在（第1・2図・図版1-1）するもので、平成11年7月に携帯電話無線基地局建設工事に伴う事前調査において縄文遺物が出土し、遺跡であることが確認されている場所であった。したがって当地域における平成12年度の益美地区営中山開地域総合整備事業に伴い、発掘調査を実施することになったのである。

発掘調査にかかる手続きは、まず事業主体者側である益田農林振興センターと委託契約を平成12年5月18日に締結し、同年9月6日付けて文化庁宛に発掘通知を提出したのであった。

## 第2節 調査の経過

現地調査は平成12年11月9日から実施し、終了したのは同年12月25日であった。調査面積は150m<sup>2</sup>で、比較的短期間に終わったのは、地山に至るまでの堆積層が30~50cm程度と掘削度が少なく、また遺構数も少なかったことによる。

出土遺物は600点余りで多量とはいえるものではないが、縄文時代中期から弥生時代後期に至る時期幅のものが検出され、該当地の立地が原始・古代において最好地であったことを窺われるものであった。

(渡辺友千代)



第1図 位 置 図



B区の発掘作業風景

## 第2章 調査地区の立地的環境

### 第1節 地理的環境

本調査が行われた澄川地区は、匹見町内のうちの1大字をいい、それは匹見川の下流域にあたる南西側に位置する（第1図）。

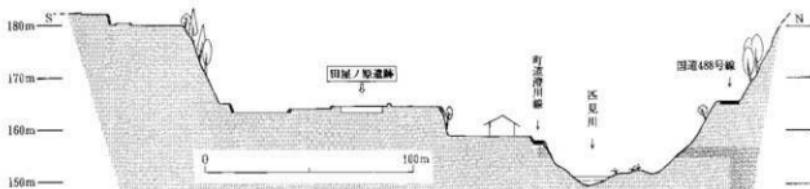
その澄川地区は、持一郎・三出原・長尾原・能登・土井原・谷口の6つの小字からなり、このうち遺跡は、匹見村として合併編入される昭和30年以前、匹見下村の中心であった三出原に存在する（第2図・図版1-1）。したがって今もその面影をのこし、本地には公民館・診療所・小学校などといった公的機関がみられ、また人家も点在している。

また地形的立地は、北西流する匹見川に沿う狭長な谷平地が形成され、一方、周辺からは野間山（724.8m）などの山地がせまつていて、可耕地は極めて少ない土地柄である。そしてこれらの人文域としての可耕地の標高は、140～200mを測り、遺跡は匹見川がつくった3段からなる河岸段丘のうちの2段めに形成されている（第3・4図・図版1-1）。



① 田屋ノ原遺跡	② 嶽城跡	③ 舟戸遺跡	④ 小田原遺跡
⑤ 山根ノ下遺跡	⑥ 長蓮寺跡	⑦ 丸瀬鉢跡	⑧ 叶松城跡
⑨ 金山城跡	⑩ 城平城跡	⑪ 火ノ口鉢跡	⑫ コンボリ遺跡

第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図



第3図 地形断面図

## 第2節 歴史的環境

本地区における原始・古代遺跡は顕著ではなかった。しかし、平成11年度から始められた県営圃場整備事業に伴い分布調査等を実施したところ、その存在が認められるようになってきた。例えば持三郎の舟戸遺跡では縄文時代前期のものが、そして同地の小川原遺跡では縄文時代中期のものが存在することが明らかになったのである〔註1〕。

また、中世遺跡においては持三郎の山根ノ下遺跡があって、それは室町期における同地の支配者階級者の住居址と想定できるものであり、青・白磁などの輸入陶磁器、鉄剣や和鏡などが出土した貴重な遺跡も存在している〔註2〕。そして山城跡では寺戸氏が扱ったといわれる叶松城が土井原に、その向城としての役割を果たした旗城跡が対岸の指呼にみえるといった環境にある。

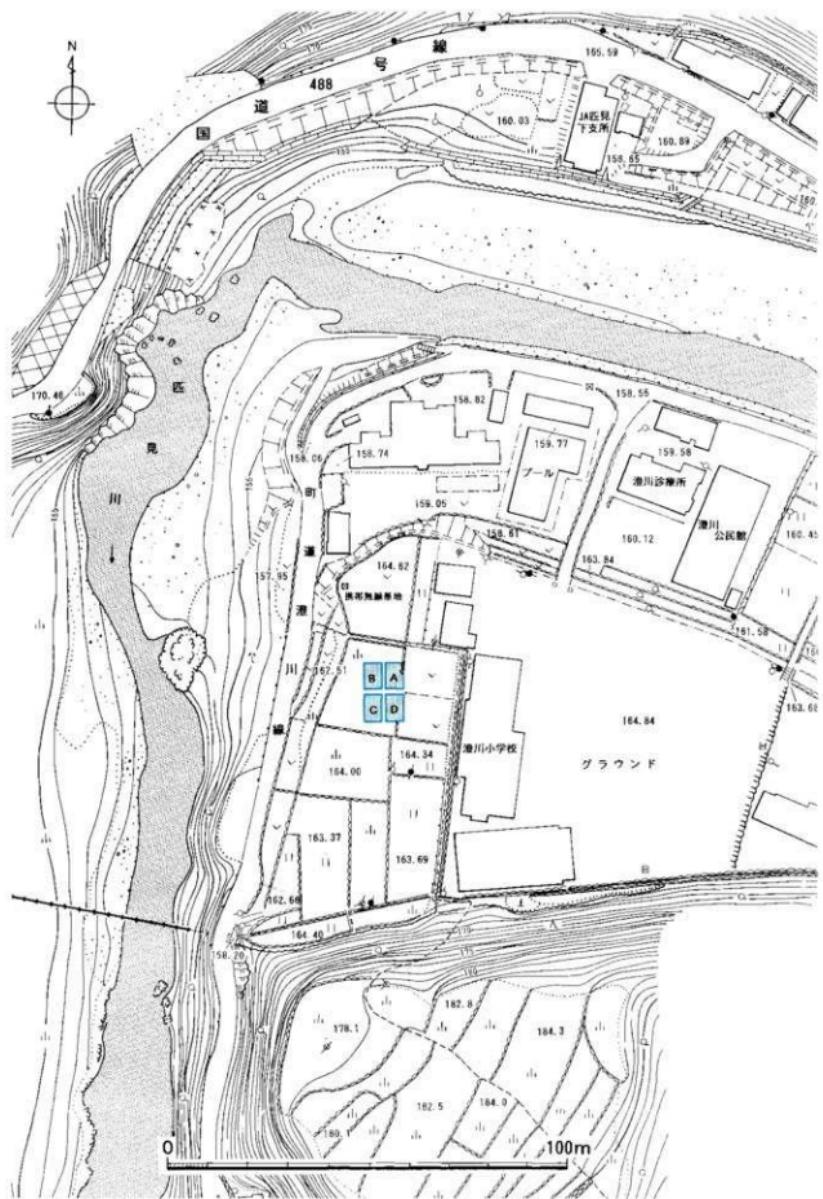
これらの山城跡は、そのほか澄川氏が扱ったといわれる谷口の金山城跡にもみられるが、いずれも山地が舌状に突出し、そしてその山下を河川が周流するといった地形に点在しているといった形態のもので、本地区の地域性をよく顯わせているものといえよう。なお、近世期における周知の遺跡では持三郎に長蓮寺跡がみられるほか、また能登には丸洲鉛跡、そして火ノ口鉛跡などの製鉄遺跡が分布しているという状況である（第2図）。

（渡辺友千代）

〔註1〕 「匹見町内遺跡詳細分布調査報告書類」（第30集）匹見町教育委員会2000年3月

「小川原遺跡」（第35集）匹見町教育委員会2001年3月

〔註2〕 「山根ノ下遺跡」（第34集）匹見町教育委員会2001年3月



第4図 調査区配置図

## 第3章 調査の概要

### 第1節 はじめに

調査対象とした地点は、匹見町大字澄川イ322番地ほかに所在し、そこは田屋ノ原といわれている場所で、その地名をもって遺跡名とした。現地は匹見川との比高差約10mを測って2段めの河岸段丘のうち、その最西端にあたっている。

そこは水田と化され、北一南方向に細長い凡そ3500mの広さをもち、河岸端の北側は標高約164.6m、山裾の南側は約163.5mを測って、約1.1mの高低差の場所である（第3・4図・図版1-1）。

### 第2節 調査区の設定

調査区は、調査対象域とした北西端で携帯電話無線基地工事に伴い、調査を実施した際に数点の縄文遺物が出土していること、また山裾の南側端は旧河道の形跡が窺われたので、それらのことを考えた上、任意にやや北寄りに設定することにしたのであった。

調査区は、磁北方向に向かって15mのものを、東一西方向には10mを測る長方形の、つまり150m<sup>2</sup>のものを実測した。そしてその調査区には4等分するように、磁北方向に幅50cmのベルトを、また東一西方向には幅1mのものを十文字に区画して設定したのであった。また、4等分した地区には北西側のものをまずAとし、左回りにB・C・Dのアルファベット用いて地区名としたのであった（第4図）。

### 第3節 堆積層序と遺物包含層

#### 1. 堆積層序

本遺跡の基本的層序は、まず1層の水田耕作土の暗灰色土、2層の酸化鉄が含浸した橙褐色土、3層の黒褐～暗灰色砂質土、4層の黄灰～黄褐色砂質土の順で堆積していた（第5図・図版1-5・1-6）。

このうち1層の耕作土は、層厚10～25cmと堆積に厚薄差がみられ、それは凡そ北東辺が薄く、その逆に南西辺は厚いという傾向がみられた。また2層の橙褐色土は、尖滅部分から10cmと波状的に酸化鉄分が含浸しているもの、上質的には下位層の3層として捉えられるものであった。

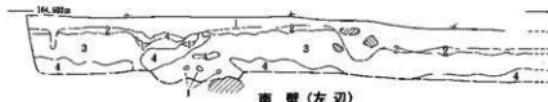
つぎの3層の層厚は、尖滅部分から厚いところで40cmを測り、それは北東辺側は薄く、その逆に南西辺側は厚く堆積していたのである。これは水田造成などによって、北東辺が後世に削平されたものと考えられる。また木層を色調から分層していないが、概して上位部は黒褐色、下位部に向かっては暗灰色を呈して漸次していた。そして基盤層と思われる4層は、黄褐色から褐色おびる砂質土であった。部分的に人頭から50cmを越える河原石がみられ、とくに中央部西寄りには集中的に露頭していたのであった（第10図・図版4-4・4-5）。

#### 2. 層序と遺物・構造

遺物は、1～3層にかけて総ての層序に出土（第2表出土遺物集計表）している。ただし、1層の



- 1層 鮎灰色土(耕作土)
- 2層 棕褐色土(腐化鉄の含浸による)
- 3層 黒褐色~鮎灰色砂質土(10~20cm大の角・円礫を含む)
- 4層 黃色~青褐色砂質土(人頭~50cm大の円礫を含む)



第5図 土層図

第1表 遺構計測表

計測 遺構	幅 cm	短径 cm	長径 cm	深さ cm	表面面積 m	摘要
P 01	26.0	34.0	—	3.0	164.043	迷穴?
P 02	18.0	18.0	—	2.0	164.053	—
P 03	25.0	28.0	—	9.0	164.053	—
P 04	29.0	34.0	—	7.0	164.083	—
P 05	25.0	28.0	—	10.0	164.053	—
P 06	18.0	22.0	—	19.0	164.053	—
P 07	21.0	26.0	—	10.0	164.053	—
SK 01	50.0	—	—	18.0	164.113	数体の河原石を作ら
SK 02	77.0	116.0	—	17.0	164.083	多量の炭化物が混入
SK 03	44.0	46.0	—	9.5	164.098	—
SK 04	—	138.0	—	15.0	164.053	角端を含む
SK 05	74.0	123.0	—	22.0	164.013	部分的擾乱
05-1	37.0	—	—	12.0	164.033	—
SK 06	92.0	108.0	—	17.0	164.003	—
SK 07	34.0	40.0	—	10.0	164.053	—
SK 08	24.0	52.0	—	11.5	164.058	迷穴の柱穴?
SK 09	—	—	—	11.0	164.023	角端に半出
SK 10	—	91.0	—	21.0	164.003	—
SK 11	42.0	70.0	—	10.5	163.978	—
SK 12	42.0	50.0	—	9.0	163.953	—
SK 13	43.0	50.0	—	8.0	163.943	—

水田耕作土に出たものは、後世の人为層といえるものであることから、それらは他層からの搬入したものと捉えられる。

このうち最も多く出土したのは黒褐～暗灰色紗質土の3層で、うちでも上位部（黒褐色土）に各時期差があるものが（中世以降のものは別にして）、多出したのであった（第2表）。したがって、3層が本遺物の包含層として捉えられ、同一層内の複合包含層ということができよう。しかし各時期差のあるものが、同位層で捉えられたことに疑問がないでもない。これは特に北東辺部において上位層の深い削平等によって搬入、また逆転等もあって、層位ごとの採り上げに誤認もあったかと思われる。ただしB区では、3層下位部で縄文土器が弥生土器より高い比率で捉えられていること、そして特に弥生土器は全体的に、その出土比率が3層上位部から2層（3層に準ずる）で多半が捉えられていることから、統計的にみても縄文遺物は3層下位部、また弥生遺物は2～3層上位部に包含するものと想定している。

なお遺構は、3層と4層との層界部に検出されたが、縄文・弥生文化が介在したことが確認されるものの、共伴遺物が検出できなかったことなどから、それらを時代ごとに分別することはできなかつた。また遺物の出土を2・3層上位部、そして3層下位部に分別したが、その3層内での垂直分布内では遺構を捉えることができなかつたのである。

## 第4節 遺構

### 1. はじめに

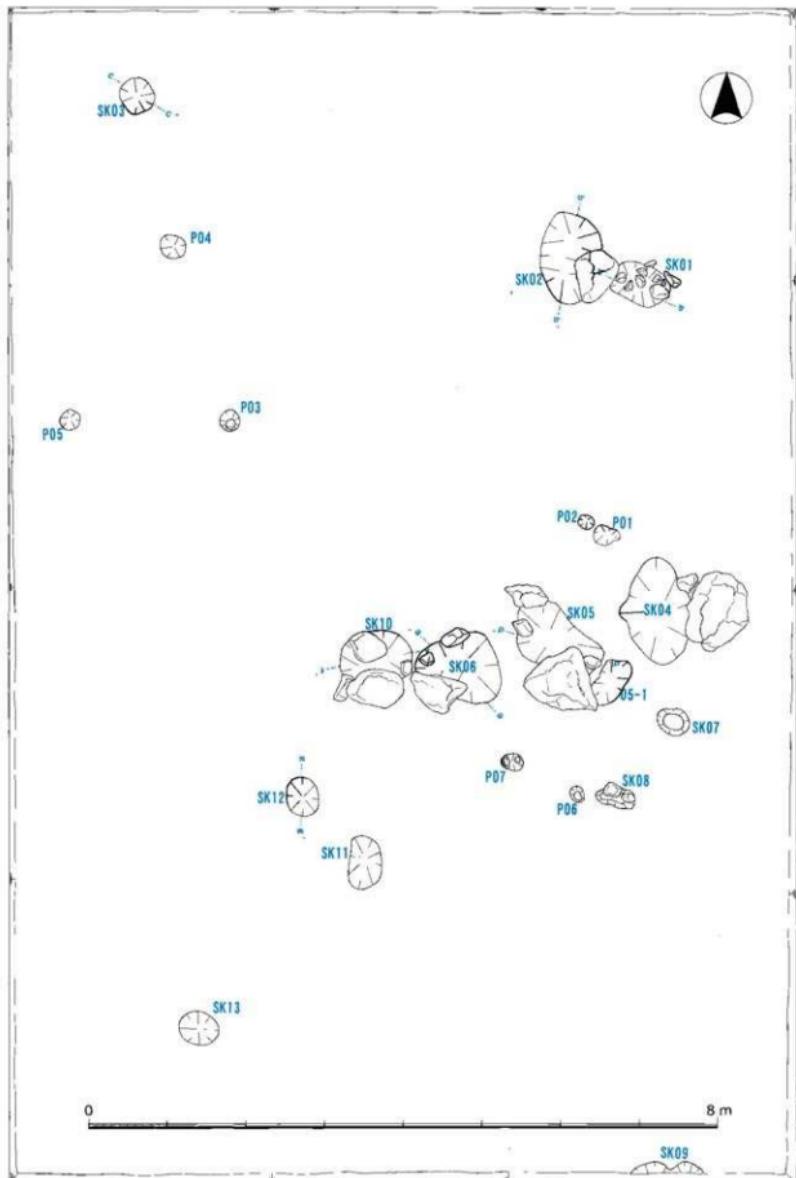
遺構と捉えられるものは21基が検出（第1表遺構計測表）され、これらを形状から2つのタイプに種別し、つまりピット状のものをP、また上坑状のものをSKと略号した（第6図・第1表）。それは形態上からみたものではなく、凡そ径が30cm以下のものをP、それ以上のものをSKとすることにしたまでのことである。

これらの遺構は総て、3層と4層との層界に検出されたものであって、他の層位では捉えることができなかつた。また共伴遺物も確認されていないことから、各遺構とも明確な時期付けもできていな

い。

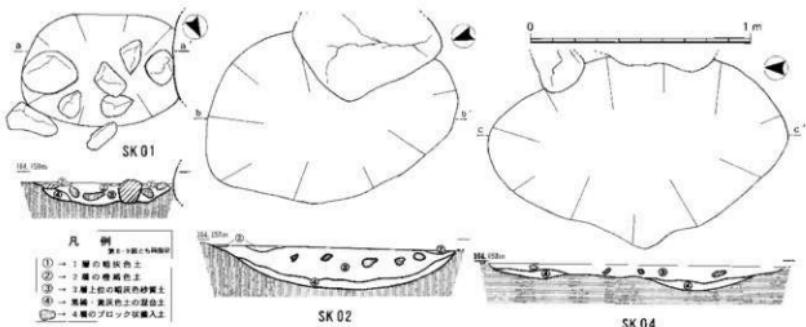
### 2. 遺構状況

遺構の断面坑形は、一部のピットを除いていずれも弓状を呈して弛緩であり、その坑界部も砂質土に陥入されたものであったため不明瞭であった。そして遺構の立ち上がり部分が明確に捉えることが



第6図 遺構指示図

できないことから、おそらく多半がその坑底部分のみであろうと考えられ、したがって原形をとどめているものではないと思われる。以下、そのうち数基の遺構について、その検出状況をみていくことにする。



第7図 遺構陥入状況図(1)

SK01(第7図) 北東辺部に検出された楕円形の土坑(第9図・図版2-5)。短径凡そ50cm、長径は石体が介入しているため定かではないが、凡そ80cmを測るものであろう。そして表出面と最坑底との差は約18cmを測って浅い。土坑内外には8個の径15~25cmを測る河原石を伴い、3層上位の暗灰砂質土が陷入する。介在する河原石は、他との土坑での検出状況の差異などからみて、本坑に伴うものと想定されたが、その意図的な意味は明らかにできなかった。

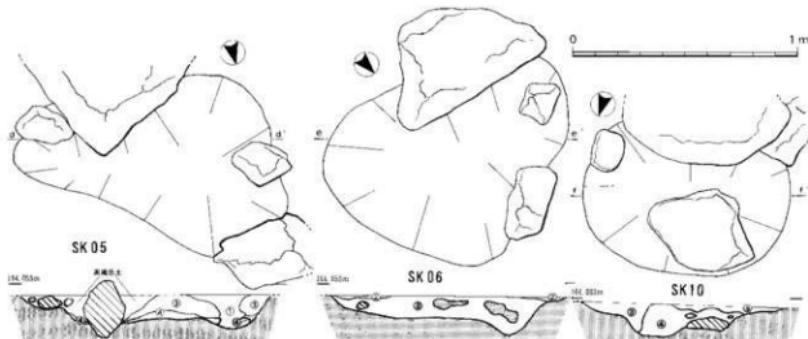
SK02(第7図) SK01に隣接して表出した楕円形の土坑で、その陥入断面は弓状を呈して弛緩であった。土坑内には暗灰色土が陷入し、多量の炭化物が検出された。そして5cm内外の角礫もみられ、部分的に4層の黄褐色土がブロック状に嵌入していたのである。また坑底部には3層上位の黒褐色土上の陷入も捉えられ、それが意図的に構築された遺構であったと同時に、そこで火が用いられたものと想像された。ただし焼土は確認されていないことなどから、はっきり地床であるとは断定できるものではなかった。

SK04(第7図) 調査区の中央部の東端に検出された不整形の土坑(第6・10図)。短径凡そ85cm、長径約140cmで、表出面と最坑底との差は15cmと浅く、2つの僅かな弛緩の陥り込みがみられた。坑内には暗灰色砂質土が陷入し、僅か3~5cmの大河床礫を含んでいたのである。

なお、全体的に本辺部には数基の遺構が確認され、しかも河原・礫石が集中していた(図版4-4-5)。したがって表出した頃初、本辺部が全体的に竖穴住居址ではないかと思われたのであるが、掘削を進めるにつれ、次第に各遺構ごとに分かれはじめたので、そうではないことが明らかになったのである。なお本遺構も、明確に機能的位置付けはできなかった。

SK05~SK12(第8~9図) 図掲したSK05・SK06・SK10は、いずれも調査区の中央部から東辺にかけて検出された上坑である(第6図・図版4-4)。

このうちSK05は短径約74cm、長径約123cm、深さ約22cmを測る不整形のもの。土坑内外には自然の



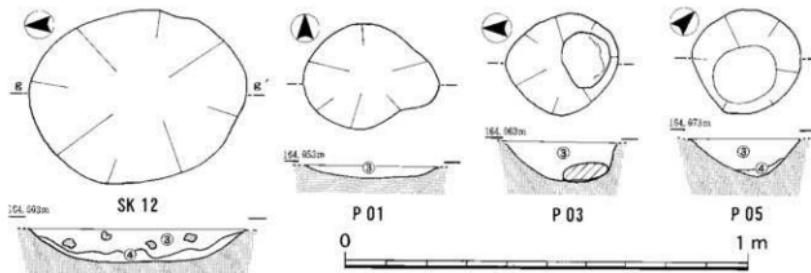
第8図 遺構陷入状況図(2)

露頭、搬入したと思われる河原石・礫石がみられ、一部には1層の暗灰色土が混在していたのである。数石の50~80cm大を測る河原石の介在は、地山(4層)からの露頭するものがみられることなどから、本遺構に伴ったものではないと判断された。

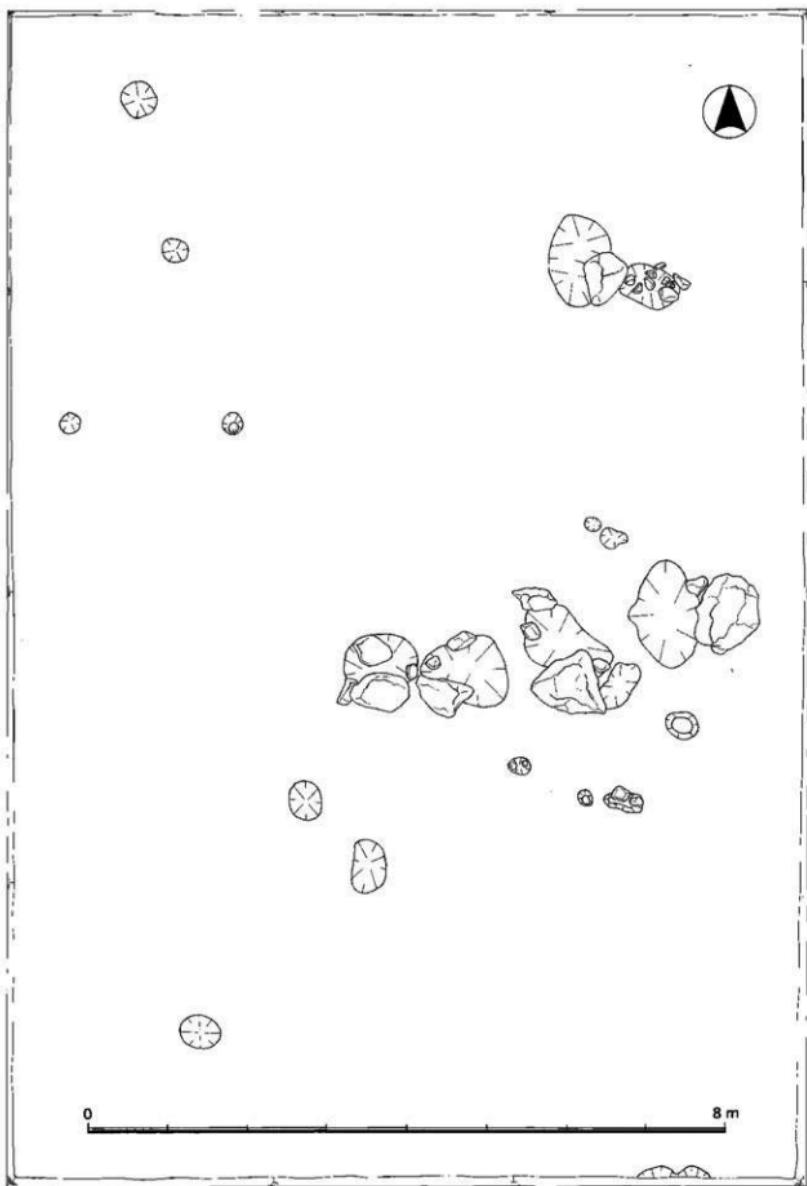
またSK06も、大小の差のある河原石が介在していた。大半が3層上位の暗灰色土が陷入していたが、部分的に黄褐色土がブロック状に嵌入する。共伴遺物もなく、その機能的位置付けはできなかった。

SK10は、短径約92cm、長径約108cm、深さ約17cmを測るほぼ円形を呈した上坑。坑内には黒褐色土(黄褐色土が混入)や暗灰色土などが陷入し、その堆積の仕方からは2次的掘削が行われているのではないかと思われる様相を呈していたのである。なお、本坑にも40~70cm大の大小の河原石が介在していたが、土坑との整合性からみて、これらも意図的なものであったとは考え難い。

SK12は、自然の河原石や礫石が隣近にはみられない南西辺部で表出した土坑(第6・9図・図版3-3)。短径約42cm、長径約50cm、深さは約9cmと浅く、楕円形をした上坑。ほとんどが暗灰砂質土が陷入していたが、坑底部には僅かな黒褐色の強い混合(4層)土がみられ、また陷入した暗灰砂質土内にはブロック状の黄褐色砂質土が嵌入する。



第9図 遺構陷入状況図(3)



第10図 遺構図

ピットの状況（第6・9図・図版3-5-6）。ピットの計測等については第1表で示しているとおりで、一応7基が検出できた。いずれも介在した層位が砂質性ということもあって、坑壁は貧弱で、これらが柱穴跡であるということを断定できない。ただし巾には坑形状から認められるものも散見される（P06・P07）。

このうちP01は、SK遺構が集中する中央東辺部で検出されたもの（図版4-4）。短径約26cm、長径約34cmで、最大深さ3cmと浅かった。表面の坑形からみて、柱状の連穴跡ではないかと思われた。ただし、少ない残存の痕跡からは断定できるものではなかったのである。

P03・P05は、調査区の北西辺で検出したもので（第6図・図版4-1）、両者とも暗灰色土が陷入し、そのうち前者は坑底部に最大径約18cmを測る平坦な河原石がみられた（図版3-5）。またP05の坑底には混合土の陷入も確認され、これらが意図的な構築されたものであったとともに、形状から柱穴であった可能性が強い。ただしこれらを柱穴と想定したとしても、柱列型態などからみて、そこには整合的な具体性の構築物は浮かび上がせるることはできなかったのである。

### 3. 結句

遺構の遺存は、全体的に良いとはいえるものではなかった。これは遺物の出土傾向が3層上位部に多出したということからみて、その部位に遺構の構築がなされたものと思われ、したがって捉えられた3・4層との境界部との差があったことによると思われる。つまり捉えられた遺構は、その末端部の一端に過ぎず、大半は同一層内であることから構築部位を見逃しているものと思われる。また発掘状況からみて、本調査域が後世によるところの水田造成などで深度の高い掘削が行われたことがわかるが、そうした要因も一方で影響していると思われた。

よって本遺構群は、出土した遺物から弥生・縄文時代の複合したものに伴うものであろうが、今までみてきた諸状況や該当期を位置付ける共伴遺物も認められないことなどから、遺構からの具体的形態は明らかにできなかったのが実状である。

（渡辺友千代）

## 第4章 出土遺物

### 第1節 はじめに

遺物の採り上げについては一応、原位置方式で行った。ただし、後世の人為的行為を作ったと考えられる1層の耕作土のものは、その方式を用いず、ただ層名を記して採集のみとした。そして2層との層界が不明なものもあり、大半の2層においても採集のみにとしたのであった。したがって、原位置方式を用いたのは3層内に出土したものに限って行ったことになる。

そして3層に出土したこれらの遺物は、垂直分布状況からの傾向を得るために、さらにその層位において上・下の部位とに凡そ分別して採り上げたのであった。

### 第2節 遺物の出土状況

#### 1. 出土遺物について

遺物の種類と出土地点については第2表（遺物集計表）のとおりで、その点数は約580余りであった。これらのうち最も多かったのは弥生土器片で、出土総数の半分以上を占める377点であったのである。そして縄文土器片の総数は約80点余りと次いで多く、このうち12点は滑石が混入された土器片であった。なおこれ以外、24点のものには縄文土器、あるいは弥生土器のいずれかに属するものを判断できないものもあり、これらを含めると480点余りとなり、出土総点数の83%を縄文・弥生土器片が占めていることになる。

そして、比較的多く出土したのが1・2層を中心とした陶磁類で41点、次いで石器剥片の30点、9点の打製石斧、6点の石鏃の順であった。なお、他には数点の上師・瓦器質土器片や瓦片、金属類の鉛なども出土しているとともに、少量の焼土灰や炭化物も検出されたのであった。

#### 2. 遺物の出土傾向

8割以上占める縄文・弥生土器片の出土傾向からみると、その包含層は黒褐色～暗灰色砂質土の3層であったといえ、そのうちでも3層上位部に集中して出土している（第2表）。さらにその出土傾向を捉えると、弥生土器片は1～2層が最も多く、そして3層上位部という傾向を示している。また縄文土器は3層上位部に集中し、そしてB調査区にみられるように3層下位部という出土構図が読みとられるのである。

文化構築部位は同一層内ということもあって、捉えることができなかつたが、これらの出土傾向からみると、縄文文化期のものは3層上位部、また弥生文化期のものは2層辺部にあったのではないかと想定する。ただし上位部におけるところの深度の高い削平が行われた様子が看取できること、中には採り上げにおいて層位の捉え違いもあること等から、明確には言えそうにもないのが実情である。

### 第3節 実測遺物

#### 1.はじめに

出土した577点（焼上痕・炭化物は除く）のうちから、形態的または特徴的なものを抽出し、以下みていくことにする。なお縄文・弥生遺物以外は、極めて断片的であること、また外すことによって本遺跡の性格的な位置付けに大きな支障はないものと考え、紹介はしないことにした。

#### 2.実測遺物

縄文土器（第11図・図版5-1）1～11は、総て粗製系の縄文土器で、そのうち1～4は滑石が混入されたもの。うち1は胴部片で、外面には並行にやや角張りある曲線の凹線文を描き、その膨らみには列点文を施す。外面は橙褐色、内面は橙褐～銀色を呈する。2は、内外面とも板状施文具によるケズリで、曲線状の隆帯文部は板状施文具による研ぎ出しひうにつくり上げ、そこに列点文を施している。色調は青灰色。3は、外面に段差のある凹線文を複雑に描き、その1曲線には凹線文に列点文を施したもの。内外面とも平滑で、ナデ仕上げとする。4は、内外面ともケズリで調整された胴部片で、辺部に凹線文らしい部分が看取される。外面は橙褐色、内面は青灰色を呈したもの。

5は、外面に縱方向の縄文、内面はナデ仕上げとした薄手の胴部片で、このうち外面には深浅差のある縄文を施す。内外面とも色調は黒褐色を呈し、焼成は堅緻である。施文方法などからみて、おそらく船元4式に比定できるものであろう。6は、口端部を矢ぐロ縁部。外面側に「L」状の稜をつくって肥厚させ、そこに横方向の巻貝を押圧させる。内外面とも条痕調整の後、軽いナデを施し、色調は暗灰色。

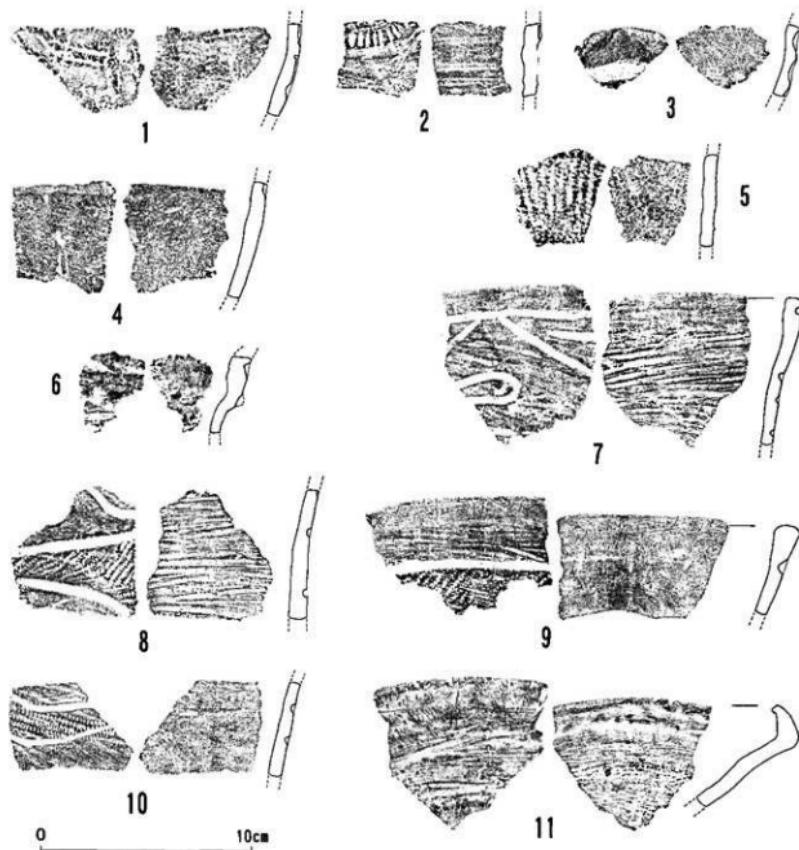
7～11は、施文や形態的にみて、縄文後期に位置付けられるもの。そのうち7は、頸部からゆるや

第2表 出土遺物集計表

	打撲 石斧	麻縄石	剥片	石鏃	石錐	石器	縄文 土器	滑石 入土器	火生 土器	圓底 土器	瓦質 土器	陶器	銅 器	鐵	焼上 痕	炭化物	計
A 1～2層			1						7								16
3層上位部								3	16								19
区 3層下位部									2								2
B 1～2層				1				4	27								39
3層上位部								1	20	2							24
区 3層下位部								12	10								22
C 1 層			3					6	53	4							76
2 層			5					9	63								79
区 3層上位部	6	11	3		4	13	8	65	10								120
3層下位部								7	4	1							12
D 1～2層			3					3	26	3							52
3層上位部	2	1	3	3	1		5	36	5						1	少量	57
区 3層下位部								1	2								3
AB 1～2層			1					1							1		3
ベルト 3層上位部								1	7								8
BC 1～2層										4							4
ベルト 3層上位部										5							5
CD 1～2層									2						1		3
ベルト 3層上位部	1								22								23
ADベルト 3層上位部			1							2							3
表面採集									6								6
廐上									1								1
計	9	1	30	6	1	4	66	12	377	24	1	2	41	2	1	—	577

かに開き、口縁部をやや肥厚させたもの。内外面とも条痕調整のままで、その外面のII端部には斜向や直線、その下位には楕円を施す。沈線は比較的太く、棒状の施文具によるものであろう。8は、頸部片とおもわれるもので、内面は条痕調整、外面には棒状具による幅広の曲線で区画をし、そこに縄文と磨消しを施す。おそらく中津式に併行するものであろう。9は、II端部を肥厚させた口縁部で、外面には条痕調整がのこり、横方向の幅広の沈線を施し、部下は縄文で飾る。10は、曲線文の区画に巻貝による疑似縄文を施文したもの。11は強く開き、その口端部は内傾させた口縁部。内外面とも条痕調整で器壁は比較的厚く、色調は暗褐色。形態的にみて、縄文後期末、あるいは晩期前半のものかも知れないが、いずれにしても判断のむずかしい土器である。

石器（第12図・図版5-1）1は頁岩製の擦切り磨製作斧で、器長15.3cm、器幅5cm、厚さ1.6cmを



第11図 縄文土器実測図

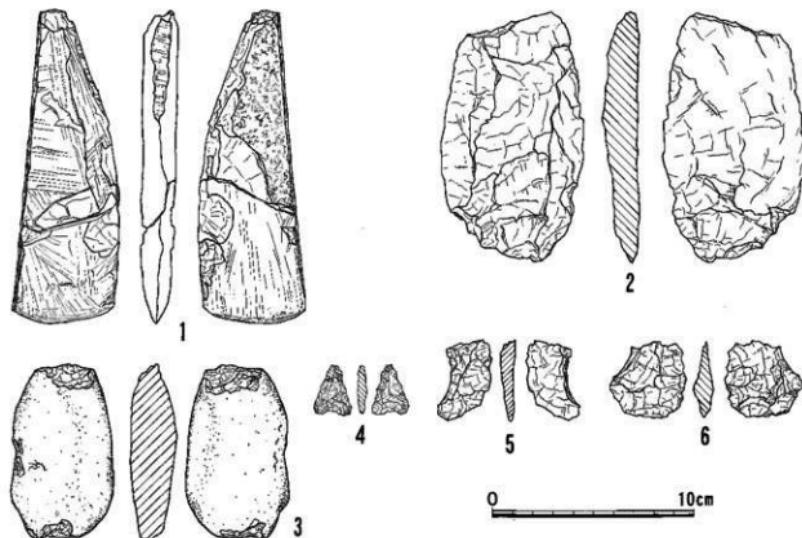
測る。右辺側は円状に弧を描いて変形するが、これは損壊した後に刃辺部側を再修正したためであろう。2は、玄武岩製の打製石斧で、器長12cm、器幅7cm、厚さ1.5cmを測る。丁寧な2次的加工はみられず、比較的大振りな打撃のみで体裁が整ったものと思われる。

3は、花崗岩製の自然石を用いて両端を打欠いでつくられた石錘。4は安山岩製の石鎌で、器形は鎌形のもの。剥離は丁寧とはいえないが、器形は比較的に整っている。5・6は、安山岩製の石器剥片。

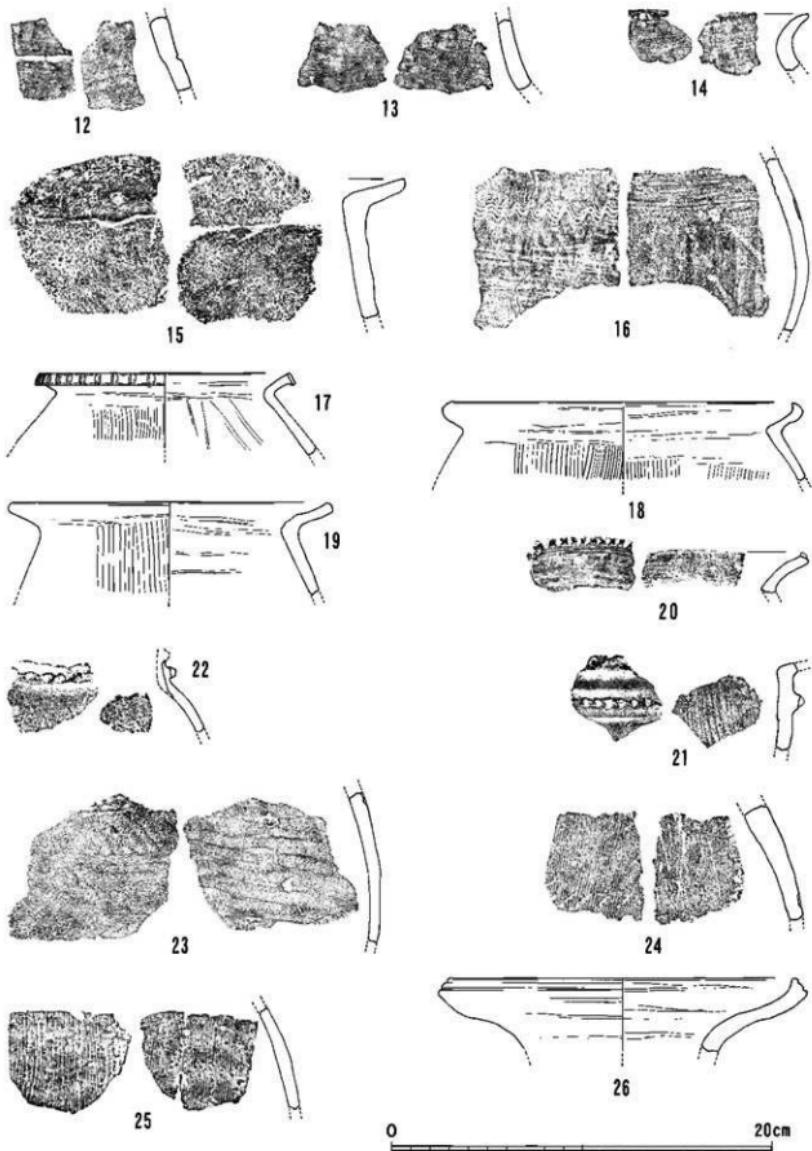
弥生土器（第13・14図・図版5-2-3）12～14は、弥生前期に位置付けられる土器。このうち12は壺形のもので、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整とし、外面の頸部界に直線文を施して稜を有する。胎上には砂粒を含み、黄灰色を呈する。13も壺形の頸部片と思われるもので、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。胎上には石英や長石の砂粒を含み、橙褐色を呈する。14は、壺の口縁部。内外面ともナデ調整である。

15・16は、器形や調整などからみて、弥生中期初めに比定されるもの。このうち前者は、口縁部が大きく外反し、その口唇はやや平坦をなす。外面はハケメ、内面はナデ調整で、色調は赤褐色を呈する。後者は脣部片で、内外面ともナデ調整とし、外面には3条のクシガキによる波状文を描く。焼成は堅緻で、色調は暗褐色を呈する。

17～25は、弥生中期の中ごろのもので、弥生Ⅲ様式に比定されるもの〔註1〕。そのうち17は、頸部がくの字状に屈折し、その口唇部は平坦面をつくり、その部辺に鎧具状のもので压痕を列文する。内面はナデ、外面には縦方向のハケメ調整で、器壁は薄手、焼成は極めて良い。18は、頸部はくの字



第12図 石器実測図



第13図 弥生土器実測図（1）

状に屈折し、口唇部は嘴状を呈して内傾する。内外面ともハケメ調整で、口縁部は丁寧なヨコナデ。器壁は薄く、色調は橙褐色を呈し、焼成は堅緻。

19も、17・18と調整はほぼ同じであるが、色調は暗褐色。20は、口唇部に連続の圧痕文が施されているもの。21・22は、広口壺の頸部片と思われるもので、内外面ともナデ調整とし、外面には突帯文の貼付けがされ、その頂部を連続圧痕を施文したもの。23～25は、いずれもハケメ調整とした胴部片。

26～29は、弥生Ⅳ様式に比定されるもの。そのうち26は、内外面ともナデ調整の高环の環部で、口縁部拡張面に2本の凹線を施文する。27・28は胴部片で、内外面ともナデ調整したものの。両者とも外面に斜向・横方向の刺突列点文を有し、器形が不明であるため確定することはいえないが、調整・施文方法からみて弥生Ⅲ様式に捉えられるものかも知れない。29は、直口口縁の鉢形のもので、内外面とも縱方向のハケメ調整。端部を円く拡張し、その突出した外面びらに圧痕を列文する。

30・31は、弥生V様式のもの。そのうち30は、直口口縁の鉢形のもの。内外面ともナデ調整とし、端部は円く拡張させ、その外面に突出した部分に圧痕文を連続的に施文する。調整方法からみると、弥生Ⅳ-2様式に捉えられるものかも知れない。31は、胴部片で、内面は粗いケズり、外面はナデ調整とし、その外面中位部に爪形ふうの刺突を6～8段に施文する。器壁は8～16mmとぶ厚く、胎土には3mm大の砂粒を多く含み、色調は灰褐色を呈する。

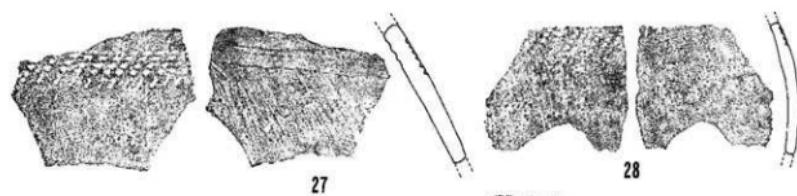
底部（第14図・図版5-4）32は、縄文土器の底部片で、胎土に滑石を混入したもの。調整はケズリの後、ナデを施す。接置面はベタ底で、色調は橙褐色である。33も縄文土器の底部。調整は内外面ともケズリで、接置面はベタ底と思われるもの。器形・調整はなどからみて、前者の時期に併行するものであろう。34は、内外面ともナデ調整としたもので、おそらく弥生中期に比定できるものであろう。35は、内外面とも丁寧なナデ調整としたもので、器形からみて壺形の底部であろう。36は、外面は縱方向のナデで、内面はケズリ調整とした弥生土器の底部。器壁はブ厚く、胎土に砂粒を多少含み、色調は褐色である。

#### 第4節 小 結

本遺跡には十器様式からみて、並木3式・船元式・中津式系などの縄文時代のものと、弥生時代のものではほぼ全様式を通して出土している。縄文土器において、とくに注意されるのは並木式土器と、並行期にあるという1片の船元式の検出である。町内において並木式・阿高式といえば石ヶ坪遺跡が著名であるが、その石ヶ坪遺跡では1片の船元式、あるいは里木式は検出されていないのである。また同流域に存在している中ノ坪遺跡では比較的船元・里木式がみられたものの、その逆に並木式は1片もみられないといふ事実である。

また本遺跡において、並木式と想定されるものが12点出土しているにもかかわらず、船元式が1点であるというアンバランスも気になる。前記述の石ヶ坪・中ノ坪遺跡などから類推すると、したがって並木式と船元式は並行期にあるものではなく、そこにははある程度の時期差があるものと判断してよいのではないかだろうか。ただし、それは今回の発掘地におけるネックもあって、層位的に捉えたものではなく、ただ出土量数から類推するまでのことであり、根拠性に乏しいのはいうまでもない。

さて弥生土器のことであるが、今回I-1様式に比定されるものが出土しているということである。



27

28

29

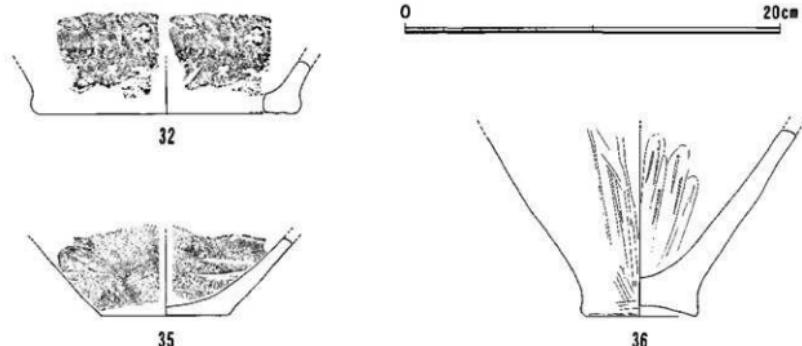
30



31

34

33



32

0 20cm

35

36

第14図 弥生土器・底部実測図

町内においてはイセ遺跡につづく2例めのものとして注意されよう。しかも、本遺跡においては後期までのものが間断なく出土していることにある。これは弥生文化を醸成する上で、何らかの有為するものがあったことに他ならないと思われる所以である。また水田ノ上遺跡では初源的な網形銅戈が発見されているという現象などには、一方ではこうした盛行する縄文文化の背景があって、それが大きな吸引力を果たしたのではないかと考えられる節がある。つまり弥生初期においては、その文化経路は中国山地沿いとする縄文ルートが未だ活かされていたのではないか、と山間地である匹見における2・3点の事実から、恣意ながら想像している。

そして指摘しておきたいのは、第13図-20(図版5-2)などでみられる口端に刻みを施文する技法である。これは第14図-30(図版5-3)でもみられるもので、特異なものといえよう。また第14図-31(図版5-3)の胸部に爪形を取り入れた施文方法は珍重なものとして捉えられることができよう。

以上、今回出土した土器から断片的であるが、数点の注意点を指摘したのみで小結としたい。

(渡辺友千代)

[註1] 「弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—」正岡陸夫・松本岩雄編1992年5月



1. 遺跡の遠望（北西から）



2. 遺跡の近景（南から）



3. 調査前の除草作業風景



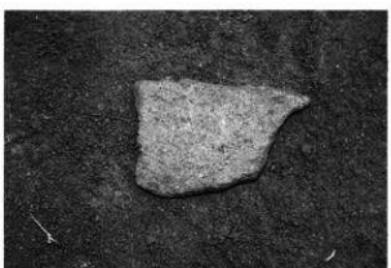
4. 発掘作業風景（B調査区）



5. 層序堆積状況（B調査区の北西隅）



6. 扰乱堆積状況（D調査区の南壁）



7. 滑石混入土器の出土状況



8. 縄文土器の出土状況

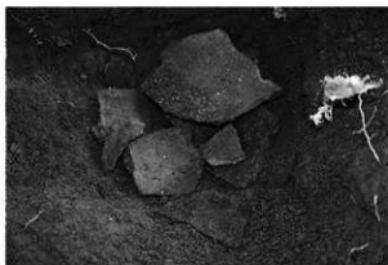
図版 2



1. 打製石斧の出土状況



2. 磨石の出土状況



3. 弥生土器の出土状況



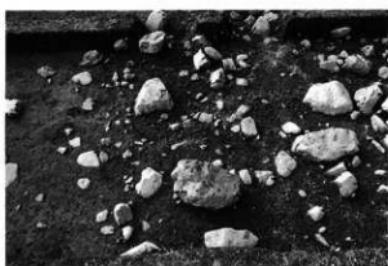
4. 弥生土器の出土状況



5. SK01・02の表出状況



6. C調査区の遺構表出状況（西から）



7. A・Dベルト撤去後に表出した遺構



8. D調査区の遺構表出状況（東から）



1. A調査区の遺構表出状況（東から）



2. SK02の半截状況（西から）



3. SK11・12・13の半截状況



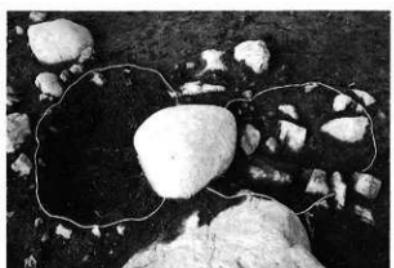
4. SK13の半截状況



5. P03の完掘状況



6. D調査区の遺構完掘状況



7. SK01・02の完掘状況



8. 壁ぎわの遺構完掘状況（SK09）

図版 4



1. B調査区の遺構完掘状況（南東から）



2. C調査区の遺構完掘状況（北西から）



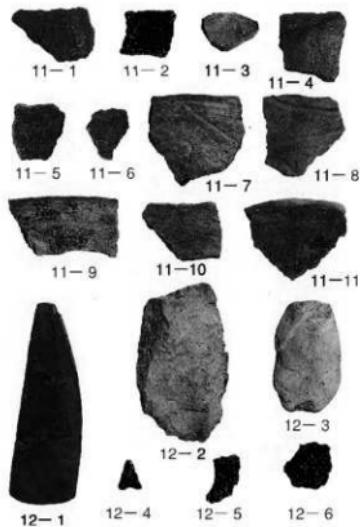
3. D調査区北半の遺構完掘状況



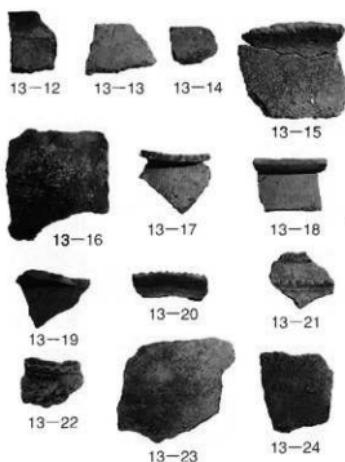
4. 東からみた遺構完掘状況



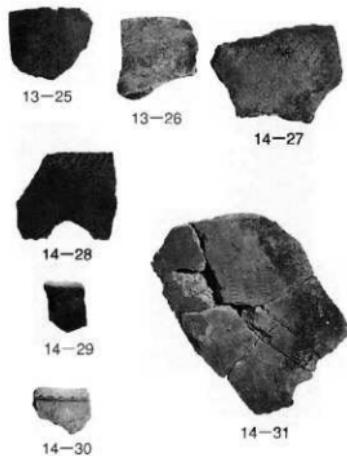
5. 南からみた調査区の完掘状況



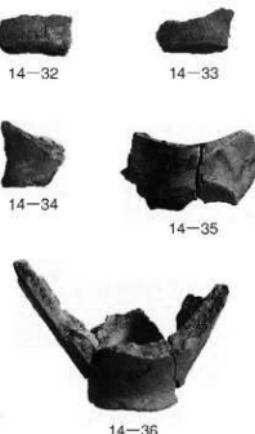
1. 繩文遺物



2. 弥生土器 (1)



3. 弥生土器 (2)



4. 土器底部



---

平成13年3月23日 印刷  
平成13年3月30日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第36集

## 田屋ノ原遺跡

発行 匹見町教育委員会  
島根県美濃郡匹見町大字匹見11260  
印刷 株式会社 谷口印刷  
鳥根県松江市東長江町902-59

---